

アートマネジメントの手法を活用した地域音楽活動と学社連携の在り方に関する一研究  
—エル・システムの事例研究に基づく活動プログラムの試案作成—

大学院教育学研究科芸術教育専攻音楽科教育学領域 竹田 健一

現代の子ども達は、指示やアドバイスに従って自らの行動規範を決定する受身的な態度に陥りがちであり、音楽においても周囲から聞こえてくる音に自ら向き合おうとしたり、自分の意思で音楽に合わせて体を動かしたりするような能動的な活動の減少に伴い、音楽を感受するために必要な音楽の基本3要素である“リズム、メロディー、ハーモニー”の知覚力や認知力が劣る傾向にある。この能動的な活動の不足を解決するために、集団による音楽活動を子ども達に担保することが大切であろう。さらに、平成24年度文科省中学校学習指導要領の「スポーツや文化及び科学等に親しませ、学習意欲の向上や責任感、連帯感の涵養等に資するものであり、学校教育の一環として、教育課程との関連が図られるよう留意すること」という部活動に関する記述にあるとおり、この面からも異学年集団による能動的な音楽活動の意義を強調したい。それにもかかわらず、学校組織の教育活動へ様々な制限が加えられる昨今の状況では、一つの学校の中だけで閉じていては出来ることも限られる。よって、学校の枠組みを超えて地域全体で子どもたちを育成する「学社連携、学社融合」の活動を視野に入れていかなければならない。

先行事例の分析は、ベネズエラ国において貧困層の子どもたちを対象に無償で音楽教育（主にアンサンブル活動）を提供し、音楽活動を通じて貧困層などの青少年非行防止や文化的向上による社会の安定を実現したと言われる「エル・システム」を対象として行った。そして現地調査は、「エル・システム・フェスティバル」「エルシステム・ジャパン」「長久手市文化の家」「ちりゅう芸術創造協会」「豊田市文化振興財団」「鈴木鎮一記念館」「NPO 特定非営利活動法人イエロー・エンジェル」「出雲芸術協会」「千葉ジュニアオーケストラ」を取り上げて、それぞれに出向いてインタビューと資料収集を行っている。

第一章では「エル・システム」の概要と現状について整理した。続く第2章では、「エル・システム」の概念を応用した日本国内における活動について、現地へ出向いたフィールド調査によって、現状把握と事例分析を行った。その中では、日本における「エル・システム」活動が抱える問題点についても、当事者に対する対面調査によって分析を試みている。まとめとなる第3章では、今後日本において地域音楽活動を推進・継続する際に避けて通れない課題を考察し、筆者が勤務する愛知県豊田市をケースとして取り上げたモデルプラン作成を試み、その際に重視しなければならない活動プラン成立要件を提案している。